

第23回県政知事懇談

湯崎英彦の地域の宝 チャレンジ・トーク (広島市)

と き 平成28年3月19日(土)

ところ 湯来西公民館 2階ホール

	目 次	頁
開 会	1
知事挨拶	1
事例発表者紹介	2
事例発表①	3
事例発表②	10
事例発表③	15
事例発表④	19
事例発表⑤	25
閉 会	30

広 島 県

開 会

○司会（豊田）

それでは皆さん改めまして、こんにちは。大変長らくお待たせをいたしました。

ただいまから、「湯崎英彦の地域の宝チャレンジ・トーク」を開催いたします。

私は、広島県広報課の豊田と申します。本日は、湯崎英彦のチャレンジ・トーク4順目の最終回ということで、スタッフも気合が入っております。元気の出る会にしたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。（拍手）

知事挨拶

○司 会

それでは初めに、湯崎英彦広島県知事がご挨拶を申し上げます。

●知事（湯崎）

皆さん、こんにちは。（「こんにちは」の声あり）

今日は大変貴重な土曜日にたくさんの皆様にお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

この県政知事懇談会、チャレンジ・トークと言っていますが、今、司会のほうからご紹介がありましたように、県内各地、各市町を回りながら進めているのですが、今回4巡目になっていまして、したがって23市町掛けるの4回なのですが、途中1年は23じゃなくて8カ所に分かれてやったこともあります。いずれにしても4巡回ってまいりまして、今日が実は最後の日となりました。

これまで9,000人を超える方々にご参加いただいています。9,420人にご来場いただきまして、発表をさせていただいた方も625人となっています。本当にご参加いただいた皆様のおかげで、我々県政の上にも大変貴重なご意見とか状況を知る機会にもなっていますし、また今日もそうだと思うのですが、我々も傍聴いただいている皆様も、発表の皆様の元気をもらって帰っていく本当にいい機会になっております。皆様のご協力に感謝を申し上げます。

これは4巡目の最後と言っていますが、恐らく全体の最後になるのではないかと考えていまして、来年度からは少し形態を変えて進めようということになっていますので、そういう意味では皆さんはラッキーです。最終回にご出席ということで、最初の回と最終回は1回ずつしかありませんから、本当にそういう意味でラッキーと思っていただければと思います。

今日ここに来る前に市内2カ所、現場訪問に行ってみりました。こうやって考えると広島市というのはやはり大きいなと思うのですが、最初に行ったところは宇品でして元宇品に行ってみりました。宇品は島になっているので山自体が岩盤でできていまして、花崗岩の島なのですが、よく見るといろいろ地学的な、地質的なおもしろいものがありまして、それをゆっくり見ながら行ってきました。これはサイコロ岩と呼んでいまして、花崗岩がこう分かれるのを節理というのですが、柱状節理などいろいろな節理があります。その1つを見たり、あるいは中に溶岩が貫入しているところが宇品で見ることができます。また、断層なども見られます。ぜひ皆さんも、ガイドのボランティアの皆さんがいらっしゃるので、お声かけをしていただいてガイドをいただいたら、すごくおもしろいのではないかと思います。

その後は湯来のほうにまいりまして、古民家SATOYAMAというところにお邪魔をいたしました。築100年の古民家を再生されて、ここを拠点にいろんな活動をされています。古民家もあるのですが、畑もあり、いろいろな活動を湯来を中心にやってらっしゃるということで、地域活性化の取組を拝見させていただきました。

本当に広島市は、やはり海から山から都会から田舎まである。広島県を凝縮したようなところではありますが、今日はその中でも5組の皆さんにおいでいただきまして発表をしていただくことになっておりますので、ぜひゆっくり最後までお聞きいただければと思います。

それでは、どうぞよろしく願いいたします。(拍手)

○司 会

湯崎知事、ありがとうございました。それでは、知事檀上のお席のほうへお移りください。

事例発表者紹介

○司 会

それでは、本日の事例発表の皆さんをご紹介します。発表者の皆さんは、檀上のほうへお進みください。

それでは、ご紹介させていただきます。皆さんに向かって左から、安佐北区小河内の資源を生かし夢や希望のある安全・安心で元気なまちづくりを行っているNPO法人小河内O(オー)プロジェクトの安福孝昭さん、それから迫田勲さんです。(拍手)

続きまして、広島の魅力を集約した広島湾岸トレイルの整備に取り組まれている日本山岳会広島支部ロングトレイル研究会代表の田川宏規さんです。(拍手)

続きまして、第 65 回学生書道展中学生の部で文部科学大臣賞を受賞するなど書道で輝かしい成績をおさめておられる市立白木中学校 3 年生の村井愛莉さんです。(拍手)

続きまして、平成 26 年 8 月の土砂災害を受け、土砂災害検知センサーユニットの研究・開発などに取り組まれている市立広島工業高等学校情報電子科を代表して岡本真美さん、坂倉佑希さんです。(拍手)

続きまして、学校が湯来町を元気にするをスローガンに、湯来南高校温泉同好会プロジェクトを実施されている県立湯来南高校を代表して和手茜さん、小田樹さん、松本鮎実さん、廣岡和樹さん、千崎梨帆さんです。

(拍手)

どうもありがとうございました。

事例発表者の皆様は、一旦席にお戻りください。

それでは、ここからは湯崎知事にコーディネーターをお願いしたいと思います。

それでは知事、よろしくお願いいたします。

事例発表

事例発表①

●知 事

それでは、改めてよろしくお願いいたします。

今日事例発表いただきます 5 組の皆さん、それぞれ地域であるとか職場あるいは学校でさまざまな活動をして、いろんな挑戦をさせていただいている方々です。

初めに発表いただきますのは、NPO 法人小河内 O (オー) プロジェクトの安福孝昭さん、迫田勲さんです。

改めてご紹介をさせていただきますと、小河内 O (オー) プロジェクトでは、過疎高齢化の進む安佐北区の小河内地区を未来を先導する里山ライフ創造のモデル地区として位置づけています。

小河内の持つ資源や特色を生かした地場産業の発掘や去年からスタートした田舎暮らし体験塾などの実施を通じた都市住民との交流や住民同士の助け合いなど、夢や希望のある安全・安心で元気なまちづくりを行われていらっしゃいます。

今日の発表のテーマは、「田舎暮らし体験塾～小河内の資源×都市の力＝過疎地域の活性化～」です。

それでは、安福さん、迫田さん、よろしくお願いいたします。

○事例発表者 (安福)

ご紹介いただきましたNPO法人小河内O（オー）プロジェクトの安福でございます。それから、後ほど説明いたします迫田でございます。

今、知事さんから大変ご丁寧なご紹介をいただきました。本来ならば、それを受けて私も10分ぐらいお話をさせていただきたいところではありますが、今日は与えられた時間が10分しかないということでございます。

まさに私どもは、広島市安佐北区の一番北に位置する、昔は安佐郡の小河内村という村でございました。そこで、とにかく過疎、高齢化が大変に進んでおります。そういった中で何とか村町交流を含めて、そういうことを進めていくことによって活性化をすることができないかということで、NPO法人を5年前、丸6年近くなりますが、立ち上げました。

その間いろんなことをやりましたが、最終的に本日発表させていただきます田舎暮らし体験塾を昨年からはスタートいたしました。大変、今のところ順調に進んでおると我々は自負しておりますが、いろんな苦労話も申し上げたいところですが時間がございません。

それでは、バトンタッチをいたします。

○事例発表者（迫田）

それでは発表させていただきます迫田でございます。よろしく申し上げます。

これからご紹介します小河内地区というのは非常に過疎化が進んでいまして、そのトップランナー、象徴的なところがございます。本日は、その状況をちらっと見ていただいて、その後、本題であります田舎暮らし体験塾についてお話をさせていただきたいと思っております。

まず小河内地区ですが、広島市内から1時間ぐらい離れたところがございます。文字どおりの限界集落なんですけど、それではおもしろくないので、「源快集楽」という字を使っています。広島市の源の地で快い暮らしができ、人が集まって楽しいまちというのをコンセプトに行っています。ご覧のような200年続いているお祭りだとか芝居だとか、非常にたくさん宝物がございます。

小河内の歴史ですが、戦国時代に小河内氏というのがこの小河内地区を統治していたそうなんですけど、その名前を取って小河内というのがついたそうです。13代城主であった小河内弥太郎さんは18歳で切腹されて、それで今でも氏子たちがご覧のようなところでお祭りを、慰霊祭を行っております。

小河内地区の現況ですが、現在456人ということで、高齢化率、それから年少率は市内最大級だろうと思っております。ここ4年間に生まれた子供はいないし、それからひとり暮らし世帯は約42%、それから年間20人前後の人が減少しております。

これはグラフにしたものですが、75歳以上が3人に1人ということで、将来大幅な人口減、さらに過疎化することが懸念されます。

かつて人が住んでいた家もこのような空き家になり、最後は廃屋になって、農地は孟宗竹が占領しています。村の神社として子供たちの相撲をとったり、あるいは餅まきをして

にぎわったところが、このように孟宗竹が占領している状況です。

この2つの集落は最も過疎化が進んだところですが、特に左のほうは、もう自治会長さんが80代の後半で入院しておられるということで、その地区の世話もできないというような状況です。

少子高齢化ということでだんだん人口が減って過疎化が来て最終的に集落が消滅して、地区全体が動くということで高度成長期時代に27あった集落が19へ減りました。それが現在、昭和一桁世代が80歳代になり、団塊の世代が高齢者の仲間入りをしたということで、さらなる集落の消滅、そしてやがては本体の消滅という大変な危機、今その崖っぷちに立っております。その原因はやっぱり夢がない、あるいは人が減ることだろうと思います。そのようなことでNPO法人を立ち上げさまざまな活動をしてまいりました。

我が村ですが、ここは大変な財産家なんです。いろんな宝物を持っています。ところが高齢者でお金がない。街には、若者がたくさんいる。この2つを結婚させれば、優秀な子供が生まれるのではないだろうかという仮説を立てて、若者のお友達30人ぐらいを呼んで田舎暮らし体験塾ということで、お母さんの里のほうでそういうような体験をさせているところです。

この概要であります。1つはお互いの思いを実現する塾である。それから1つは、お母さんの里のほうの応援をする、そういう人を育成する塾である。それからもう1つは、学校がなくなりましたので塾をつくってお互いに学び教え合うという半学半教の塾である。お金のほうはありませんので、みんな手弁当で来ていただいています。それから「そういう困っているところがあれば、じゃあ応援してやろう」ということで、サクラプリンスさんのほうに応援していただいているし、広島市さんのほうも「3年間、じゃあ養育費を出してやろう」ということで、助成金を出してもらっています。こういうことで、お互いのWIN-WINの答えが出ることを期待しております。

これは、10回の体験カリキュラムをずっとしたものです。1回から2回目は白菜を移植、それから3回目は稲刈り、そして4回目は柿もぎ、吊るし柿をつくりました。それから次は消滅した集落を見て回る。それから、冬には漬物づくり、年末になると門松としめ縄づくり、そして味噌とそば打ち。2月13日にはワークショップということで、このときには広島経済同友会の森信代表幹事さんも、個人的ですがちょっと様子を見に来たいということでお越しになりました。最後に3月5日に閉校式を行いました。

アンケートをいたしまして、その結果21人中13人、約62%が初めて小河内に来たと。「何もないのが魅力だ」とか「大変な田舎だな」という印象でした。満足度は90%、19人が満足したということで、大変評価されています。

塾生募集の経緯と思いでありますが、これは広島県さんのほうでも地域力創造課であるとか、あるいは安佐北区役所、NPOセンター等からご紹介いただきまして、集まった現在29人ですが、その年齢は20代から60代、男女は6対4の割合、市内各地から来ていた

だいています。彼らの思いは非常に志が高くて、特産品をつくりたいとか、あるいはここへ住んでみたいとか、そういうようなことで約6割の人が28年度も継続したいと回答しております。

彼らがこちらのほうで寝泊まりする、あるいは活動する拠点として空き家を改造して利用している。これは、その荷物を出しているところですね。中国新聞のほうでも紹介されました。

28年度の運営であります、1つは新しい新生が入ってまいりますので一通りの体験はします。これは必須です。それ以外に専門課程に入ってきて空き家を改修したりとか、あるいは環境・景観づくりをしたりとか、特産品を開発したりとか、それぞれの自分の専門性とか好きな分野に進んでいただいて自主的に活動してもらおうとかを考えています。それからもう1つは、彼らが小河内の中に溶け込んで地区の行事とかイベントに参加する、あるいは農作業等でお手伝いをする、そういうお助け隊をつくりたいと考えています。それからもう1つは、何か成果を出す方向に向かって道筋をつけたいということが、第2期の運営方針であります。

このように、地区民と塾生の思いが小河内を変えると、これが地方創生のモデルをつくりたいということで、小河内の「O」（オー）は人材の環、それからオーケーの「O」（オー）と、さらに可能性を秘めたゼロということであります。

大変急いで説明をさせていただきましたが、これで終わります。

ありがとうございました。（拍手）

●知 事

安福さん、迫田さん、どうもありがとうございました。

お二人とも、今小河内にお住まいだと思うのですが、これはずっとお二人ともここにお住まいだったのですか。

○事例発表者（安福）

2人ともUターンでございます。出戻りでございます。ちょうど60もつれで私も迫田も戻ってまいりました。

●知 事

どちらからUターンをされてこられたのですか。

○事例発表者（安福）

私は市内中心部です。彼も市内中心部です。

●知 事

そうですか。改めて戻って来られて、そしていろいろ感じられたことがあると思うのですが、いかがでしたか。

○事例発表者（安福）

とにかくふるさとが崩壊しつつあるということで、大変だというのが、2人とも共通の認識ですね。先ほどもありましたが、集落がなくなっているところがある。そういうことで、私も60の歳に戻ってそれから17,8年、今頑張っておりますが、せめて家の周りの先祖からもらった田んぼは何とか荒らさずにおこうと。しかし、もう80近くになりますので結構しんどいです。4反余りつくっておりますが、結構しんどいんですが今までは頑張ってやってまいりました。

○事例発表者（迫田）

40年ぶりに帰ってまいりましたら、生まれた家も集落も通った小学校も中学校もなくなっていました。非常にもう何もなくなってしまうと、この地域だけを残さなきゃいけないというふうに思っております。

●知 事

やはりそういう中で放っとけなかったという感じだったのでしょうか。

○事例発表者（安福）

まさに今、迫田からビデオでご紹介しましたように、大変過疎高齢化が、特に高齢化というのが大変私どもにとっては大きな問題でした。高齢化というのは言いかえれば少子化なんです。子供がいないんです。じいさん、ばあさんしかいないんです。そういう中で、地域が、ふるさとがすたれていくのはどうにかならんかということで、しかもそれに追い打ちをかけるように、これは県知事さんの責任じゃございませんが小学校をなくする、中学校をなくする、幼稚園をなくする、そういったことでますます若者が戻りにくい、そういう中であって何とか村町交流を通じて活性化ができないもんだろうかということでこういうことをやってきたということでございます。

●知 事

でもなかなか、そういうふうに戻ってきて「いや、大変だな」と思っても、「ああ、大変だなあ」と思うだけで過ごしていくことも可能ですし、そういう方も多いのではないかと思います。どうしても自分たちでやらなきゃいけないというふうに、一歩前へ踏み出していったのは、何か大きなきっかけとかはあったのでしょうか。

○事例発表者（安福）

はい。私、9年前から小管内地区の連合自治会長を仰せつかったことがあって、そういうまさに毎日がそっちのその課題の連続だった。迫田も同じように、私の副会長をやってくれます。そういうことで、何かとにかくやっぱりこのままじっとしとったら将来小管内の地域がなくなるということで、自治会活動がきっかけです。

●知 事

そこがスタートだったわけですね。

○事例発表者（迫田）

私は、母親が1人で田舎暮らしをしとったんですね。そういうことで、大変地区の人に世話になったということもありまして、「何か恩返しをしたい」という、そういうことが原点になっていると思います。

●知 事

なるほど。それで体験塾を始められて、先ほどのアンケートの結果にもありますが、非常に満足度が高いということだったのですけれど、どんな点がよかったのでしょうか。

○事例発表者（安福）

やっぱり29人の方のほとんどが、まず農業というか、くわ1つ握ったことがない、のこも触ったことがないという方がほとんどだったもんですから。

●知 事

なるほど、都会育ちですね。

○事例発表者（安福）

そうです。そこにまず新鮮さというのが加えられたんだと思うんですね。

●知 事

はい。「くわを握るのはもう勘弁してくれよ」という人もいるけれど、くわを握って「これは新鮮だ」と「初めてでおもしろい」という人もいるということですね。

○事例発表者（安福）

はい。結構ありましたね。

●知 事

そういうことですね。それを発見して連れてくることによって、参加する都会の人にとっても新鮮だし、小河内の皆さんにとっても何か活気が出るというような、そんなことになっていますね。

○事例発表者（安福）

はい。知事のおっしゃるとおりでございます。

●知 事

実は、小河内でやってらっしゃるこの活動、この塾ですが、これは広島県でも全く同じことを県としてやっています、里山ウェーブといって、我々は東京の人を集めて引っ張ってきまして、東京でまず下勉強をした上で、県内のいわゆる過疎地と言われるところに引っ張ってきて、いろんなプロジェクトをやってもらったりすると、非常に満足度が高いです。そういう中で、移住する人も出てきたりするということなのですが、あともう1つは、小河内もそうだし、この湯来もそうなのですが、まさに市内中心部が非常に近いところであって都会に住んでいながらもくわを持つのに何時間もかかるわけではなくて、1時間もかからない。30分ぐらいで行くと思うのですが、そういう非常にすぐれたすばらしい自然環境とかがあるということです。それを楽しめる。これは実は広島の特徴ではないかと思っています。それをうまく使っていらっしゃるなと思ったのですが、まだまだこの塾は始まったばかりで、でも満足度の高い結果がでたので、きっとまた続けていかれることにより、人の輪もふえていくのではないかと思います。まず、「いや、放っとけない」と一石を投げられて、そしてまたこの反響を今生んでいらっしゃる小河内プロジェクトですので、ぜひじっくりと育てていただきたいと思います。

それでは改めまして、発表いただきました、安福さん、そして迫田さんに大きな拍手をお願いいたします。

○事例発表者（安福）

ありがとうございました。（拍手）

○事例発表者（迫田）

こういう使用済みの割りばしを着火剤として製品化して、ホームセンターのナフコさんとかジュンテンドーで販売しております。この袋ごと火をつければ、バーベキューが簡単にできるという商品でございます。

●知 事

ジュンテンドーとナフコに行ったら、注意して見てください。

○事例発表者（安福）

これは、殿様の名前をとって「弥太郎君」です。

●知 事

はい、ありがとうございました。（拍手）

事例発表②

●知 事

それでは続いて発表いただきますのは、日本山岳会広島支部ロングトレイル研究会代表の田川宏規さんです。

ロングトレイル研究会ですが、広島湾はご存じのとおり、これはデルタなのでぐるっと山が取り囲んでいます。その山々をつなげて瀬戸内の多島美の絶景や里山の自然を満喫できるルート「広島湾岸トレイル」をつくることを目的に、平成25年7月に設立をされました。健康増進や観光資源としての「広島湾岸トレイル」の活用とともに地域の活性化を目指して活動していらっしゃいます。

今日の発表のテーマは、「広島湾岸トレイル構想」です。

それでは田川さん、よろしく願いいたします。

○事例発表者（田川）

こんにちは。日本山岳会広島支部のロングトレイル研究会の田川と申します。

ただいまより、紹介に預かりました広島湾岸トレイル構想について、しばらく時間をいただきたいと思います。

ただいま着ているこのTシャツが、我々のPRグッズです。後ろを向きますと、このように広島湾岸1周のコースが出ております。まず、このグッズを知っていただいて、次にまいります。

トレイルという言葉すら皆さんご存じないのではないかと思いますけれども、トレイルとは、人や獣が歩いてできた道のことを言います。つまり、我々が目指していることは、自然の中をゆっくりのんびりと楽しみながら、そして山を川を島を街を海を越えて歩く山旅、海の旅、里の旅を広島湾岸トレイルと呼んでおります。

それでは、山を歩くことについてどういう効果があるか、何も知らずに山を歩かれるのではなくて、なぜ山を歩くことが健康なのかということから話していきたいと思っております。

まず、山に入りますと山には山のにおい、海には海のにおいがあります。山のにおいというのは、この植物が自分の身を守るために発散しております揮発性のバリアがあります。そのにおいがフィトンチッドと申しまして、そのにおいをかぐことによって人は精神が落ちつく、または血圧が下がる、一番大きな効果というのは免疫力が飛躍的に活性化されるということです。その免疫力が飛躍的に活性化されることを利用して、現在では免疫力を利用したがんの治療法があります。また、この精神、ストレスの解消になるということが、セラピー療法ということにつながっております。広島では、深入山を利用したセラピー基地がございます。

ちなみに私、ただいま72歳でございますけれども、私は7人家族で、孫3人、息子夫婦2人と暮らしております。ただいまインフルエンザが非常に流行しておりますけれども、家族6人が熱で苦しんでいるときにも、私は平然として過ごしております。これは先ほど申し上げました免疫力が活性化しているということから来ているもんだと、私は信じております。

ちなみに私はこの2年間で、先ほど申しましたこの広島湾岸トレイルですけども、距離にして250キロあります。この250キロを恐らく900キロ以上歩いております。距離にしますと、広島から大体東京ぐらいの距離です。そのぐらい歩いておることから、恐らく私は今日でも健康体でおるのではなからうかというふうに思っております。

それでは我々の歴史でございますけれども、平成25年の7月に我々有志一同3人で立ち上げたグループです。3年になるわけですけども、一昨年4月からこのコースの踏査を開始いたしましたして、間もなくこの3月末または4月の初旬には全ての調査を終え、整備を終えてこの250キロのこの長距離自然歩道が全通する予定でおります。全通すれば、現在では日本一長い長距離自然歩道でございます。

ちなみに、間もなく国が進めている東北震災の復興事業として、東北4県にまたがるみちのく潮騒トレイル、これができますと700キロですから2位の座に転じるわけでございますけれども、現在では日本一長いトレイルでございます。そして、このトレイルを維持、管理、運営するために広島市内及びその近郊の山団体、17団体で広島湾岸トレイル協議会なるものを実は昨日付けで正式に発足いたしました。それをもって今後このトレイルの維持、管理、運営をしていくわけでございます。

また、この250キロのコース周辺には、4市5町の自治体がございます。4市5町の自治体と協力しながら、今後この活動を進めていくわけですけども、先ほど申し上げましたように、整備活動は常に必要なものでございまして、皆さんもご存じのとおり、山は人が歩かなくなるとすぐに藪になります。その藪にならないためにも、人に歩いていただきた

い。そして、その歩いていただくことによって、この地域の活性化、またその 250 キロの距離が山を歩く人たちにとって大きな魅力となって、県外または国外から多くの人を訪れるのではなかろうか、また訪れてほしい、またそのようにするという意識を持って物事を進めております。この 250 キロのコースには、43 の山、67 の峰、11 の峠、16 の河川、3 つの瀬戸、4 つの島があります。それを越えて歩く 250 キロは、実にまさに広島湾の絶景を歩く山旅ではなかろうかと思えます。また、これが全通することによって、中四国初のロングトレイルとなります。

では、この広島湾岸トレイルがもたらすものとして何があるのかと申しますと、まず一番には、やはり歩くことによる健康の維持・管理と向上ですね。つまり、健康資源になり得るものだと思っております。また自然豊かな里山、そして世界遺産である宮島、また広島湾の多島美を売り物にした観光資源になる。つまりは、今まで眠れる資源、気づかなかった資源を少し見直すことによって大きな資源になるということ、この広島湾岸トレイルはあらわすものだと思っております。

結果的に、このトレイルを通じて地域がつながる、人がつながる、町がつながる、心がつながる、元気な人づくりとまちづくりができるのではなかろうか。地域の活性化イコール観光振興、登山振興につながるものだと思っております。

これを要約したものがこの図でございます。例えば、トレッキング。山を歩いてもらった後に、広島を誇るカーブがあり、サンフレッチェがあり、もう一つつけ加えるならば広島響、こんなプロ集団が 1 つの地区に 3 つもある地域は、日本国内探してもなかなかないのではなかろうかと思えます。また歩いた後に、先ほど言ったカーブ、サンフレッチェ以外にも広島のお好み焼きとかいろんな名物料理を食べていただくというツアーも組めるのではなかろうか、つまり観光資源になり得る要素をたくさん持っているわけでございます。

先ほども申しましたように、歩くことによって健康になる。歩けば、人が隣の町から隣の町に行く、つながります。そこに人の触れ合いができます。これが、つまり健康イコール地域振興、また観光振興につながるものだと思っております。これだけすばらしい資源が、我が広島には、山があり、川があり、島があり、海があり、またすばらしい人たちがいるということでございます。これを生かさない手はないと。またこのトレイルは、都市に隣接した周回型のトレイルです。いつでも行ける、いつでも帰れるという便利のいいところでございますので、我々はこれを安・近・単と呼んでおります。ぜひとも、この安・近・単な湾岸トレイルを利用して地域の活性化、そして観光資源、登山振興につなげたいと思っております。

そのことから、我々が本年度計画しておることは、この 5 月に海外トレイル体験報告会を開催する。特に今後若い人たちに、よりこの山に親しんでいくためにも、高校、大学、山岳部の学生さんも招待して開催したいと思っております。また山好きな人、また今から山をやろうかという人たちに登山講座を推進しようと、そして山に親しんでもらおうと、

こういう企画を予定しております。また現在、このトレイルを行政向け、山団体向けさんに紹介しておりますトレイル体験会もこの5月ぐらいには26回の体験会が済みますので、それが済みますとそのまま今度は一般市民を対象にした体験会を開催したいというふうに思っております。そして来年の3月ごろまでには統一した道しるべ、標識を設置して、データブック、ガイドブックをつくりたいというふうに思っておるわけでございます。

先ほども申しましたように、これだけの43の山、67の峰、11の峠、16の河川、3つの瀬戸、4つの島を越えて250キロオーバーの4市5町を越えるトレイルは、私は自然界からの贈り物だと思っております。言わば自然界からのご接待、おもてなし、人に優しい、自然に優しい広島湾岸トレイルをオール広島で目指すことをお約束して、プレゼンを終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

●知 事

どうもありがとうございました。

田川さん、改めてこのロングトレイルは、何回か新聞にも最近紹介をされていますよね。国際的にも注目を浴びているのではないかと思うのですが、いかがですか。

○事例発表者（田川）

おかげさまで、3年前から活動を始めておりますけども、驚異的な注目度を浴びておるんではなかろうかと思っております。私は、これはなぜそうなったかということをいつも皆さんにお伝えしているわけですけども、まず素材がいい。素材がよければ、どなたにも受け入れないという要素はないと。素材がいいからこそ受け入れてもらっていると。我々は、あくまでもメッセンジャーボーイまたはウェイター、ウェイトレスだと思っております。この素材を皆さんにお届けするという役目を背負っておるというふうに思っております。

●知 事

気づかなかった資源が大きな資源になるというふうにおっしゃっていたのですが、今ご覧いただいたように地図で見ると、何かすごい中国山地の山の奥に入るわけではなくて、本当にいわゆる旧市街、ちょっと越えたところぐらいをぐるっと回っているイメージです。それこそ、バスで行って、途中嫌になったらおりてバスで帰れる感じです。

○事例発表者（田川）

そうですね。先ほど申し上げましたように、安・近・単というのは、安心して行ける、つまり何があっても都市周辺ですから、警察、消防、または万が一遭難騒ぎのときにでも、

即対応できる。近というのは、近いですね。ですから「ああ、今日行こうか」、「今から行こうか」といっても行ける場所ですね。単は簡単、つまり一般的には難しいところがない。そういう、これほど便利のいいものがすぐ自分のそばに眠っているわけです。ところが、日常の世界を見直していただければ、これがすばらしい資源になるということだと思っております。

●知 事

そうですね。宝だと思ってみると宝なのですが、ただの裏山だと思って見るとただの裏山で、それをどういうふうを活用するかということですね。掘り起こされていて、しかも今は 250 キロで日本一、何においても日本一になるのは大変だと思います。700 キロの東北のトレイルができる前に日本一というのをいっぱい宣伝しておきたいですね。

○事例発表者（田川）

そうですね。まず、1位の座がわずかな期間であっても、何とかキープしておきたいですね。

●知 事

そうですね。向こうがオープンしたら、さっきまで日本一とか言っておけば、しばらく使えますからね。

○事例発表者（田川）

そうです。

●知 事

そして、この何よりも本当にすばらしい効果もあるということで、先ほどのフィトン何でしたっけ、植物が出すこの効果のことですが。

○事例発表者（田川）

フィトンチッドです。私が思うことなんですけど、経営的に申し上げますと、対費用効果、つまり費用をかけなくても大きな効果があります。大きなお金をかけて大きな効果を得るのは、これは世の中当たり前のことだと思うんです。でも、お金をかけずに大きな効果を生む。それは「皆さん、なぜ気がつかないんですか。そこに眠っているじゃないですか」ということから、発想の中の1つにあります。費用がかからなければ、どなたも乗っかかりやすい。例えば、行政さんも乗っかれるんじゃないかと、民間団体も乗っかれるんじゃないかとということをございます。

●知 事

健康に直接役に立つし、それだけではなくて、こういうトレイルの開発を通じて仲間も増え、つながりができて、山を歩いていく人同士の触れ合いも広がっていくということで、本当に地域の活性化に大きくつながっていくのではないかと思います。これも田川さんを初めとする、このロングトレイルに着目をして、これを何とかしようという方々がいらっしゃって実現していると思います。広島の新たな宝を発見して、今磨いていただいております。田川さんに、もう一度大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

○事例発表者（田川）

どうもありがとうございました。(拍手)

●知 事

ありがとうございました。

事例発表③

●知 事

それでは続いて発表をお願いしたいと思います。

次の発表は、市立白木中学校3年生の村井愛莉さんをお願いをします。

村井さんは、日本書道教育学会主催の平成27年度全日本学生書道展中学生の部で、小学校のときに続いて2回目になります文部科学大臣賞を受賞されました。

またこの受賞にあわせて、教育、文化、スポーツの分野において、国際大会や全国大会で優秀な成績をおさめられた方を表彰する広島市のひろしまフェニックス賞も受賞されるなど、すばらしい成績、功績をおさめられています。

今日の発表のテーマは、「継続の力～書道と私～」です。

それでは村井さん、よろしく申し上げます。(拍手)

○事例発表者（村井）

私は、広島市立白木中学校を卒業したばかりの村井愛莉です。

今日は「継続の力～書道と私～」というテーマで、今回の受賞までを振り返りたいと思います。

初めに、文部科学大臣賞をいただいた作品をご覧ください。左の「西遊記」は、4年前、小学6年生のときです。そして、このたび中3で受賞したのが右の作品です。「ぞうぞう」と読みます。

書道を始めたのは、いところが先に習っていたのがきっかけです。小学1年生のころから習い始めましたが、一人っ子の私にとっては、姉のような従姉妹と一緒に習えることがすごく楽しみでした。

今回の全国大会では、従姉妹も高校生の部で受賞し、一緒に表彰式に行ってきました。2月には、広島市長からフェニックス賞をいただくこともでき、とても感激しました。

書道教室には小学生高校生もいて、みんな仲よく練習しています。新田先生はとても優しい先生ですが、礼儀作法にはとても厳しい先生です。でも丁寧に指導してくださるので、本当に感謝しています。

小学生までは週に3日、土曜日などは3時間ぐらい、このようにみっちり練習することもあります。小学生のころは、行きたくないなと思うこともありましたが、何とか続けることができました。中学に入ってから、週2日に減りました。中学生になると、学校と部活動と学習塾と書道の両立は物すごくハードでしたが、習字をやめたいと思ったことは不思議とありませんでした。部活はバレー部でリベロです。毎日の部活動に加え、休日の練習試合や公式戦で本当に忙しい3年間でした。

こんなに忙しいのに、体育祭では応援リーダーを務めたり、文化祭ではパートリーダーも務めました。白木中はジャスミンの学校とあって、ジャスミンを合言葉にみんなで行事をつくり上げるのですが、それが大好きでした。

今年は創立50周年の記念すべき年でした。一番上の写真は、全校合唱です。白木中はとても人数が少なく、全校生徒150人ぐらいしかいない上、男女バランスが悪いけど元気のよい一体感のある合唱になりました。

皆さんから向かって右側の写真はクラス合唱で、私たちはみんなで1日ずつ目標を決め、優秀賞をとることができました。また、白木中は見せる合唱と聞かせる合唱にするよう一人一人が意識しています。

皆さんから向かって左中段の女性をご覧ください。よくご存じのように、レスリングの吉田沙保里選手です。吉田選手は、オリンピックではアテネ、北京、ロンドンと3大会連続の金メダルです。今回の50周年特別記念行事にお招きし、お話を聞くことができました。

書道とは少し離れてしまいましたが、今思うと、こうやって忙しくいろんなことに取り組んできたことが、結果的に書道につながったと思います。これからも続けることで、少しずつ本物に近づいていけるし、力になっていくと信じ、とにかく続けてみます。

これから、県立高陽東高校での生活がスタートします。またまた忙しい生活になりそうです。高校では女子ソフトもやってみたいし、書道にも興味があります。また、将来は災害派遣医療チームの看護師になる夢もあるし、小学校の先生になる夢もあります。もちろん書の道も頑張りたいです。いろいろあって欲張りですが、忙しくてもつらくても好きなことはやり続けたい、そう思っています。

以上で発表を終わります。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

●知 事

村井さん，ありがとうございました。
中学時代は，本当に忙しかったですね。

○事例発表者（村井）

はい。

●知 事

バレーボールは週に何回ぐらい練習したのですか。

○事例発表者（村井）

平日は毎日で。

●知 事

毎日。

○事例発表者（村井）

はい。夏休みとかも3日ぐらいしか休みがなかった。

●知 事

それで塾も行っていたのですか。

○事例発表者（村井）

はい。

●知 事

書道もして，すごい欲張りですね。

実は欲張りライフというのを今広島県で言っていて，去年，広島県のビジョンを改定をしたのですが，そこで新しく，仕事も暮らしも欲張りを目指すというのを掲げているのです。中学生の仕事は勉強だよな。

○事例発表者（村井）

はい。

●知 事

その他のバレー部とかあるいは書道とかも両立する。中学生から欲張りライフを実現しているというのは、広島県のモデルのような子だなというふうに思います。この3年間で、一番大変だったのは何ですか。

○事例発表者（村井）

部活動です。

●知 事

部活がやっぱり大変だったのですね。どんなところが大変だった？時間をとられる。コーチが怖い。

○事例発表者（村井）

書道も午後からあるんですけど、部活動が4時間ぐらいあって、休憩時間をあまりとってくれなかったんで、すごくハードな練習で疲れました。

●知 事

なるほど。仕事だと逆に「今日は有給休暇をとって帰ります」とできるのですが、部活だとなかなかそうはいかないですね。今度は高校に入って、本当におめでとうございます。希望校に合格して、よかったですね。高校ではまた新しく、バレーボールじゃなくてソフトボールということ？

○事例発表者（村井）

はい。

●知 事

今度はそっちを挑戦する。いろいろなものに関心があるのですね。
そして将来は、災害派遣チームの看護師さん、これはDMATですか。

○事例発表者（村井）

そうです。

●知 事

DMA Tと言うのですが、実は、一昨日のトンネル事故のときにもDMA Tのチームが県内の各地から派遣がありました。その看護師さん、あるいは小学校の先生、これから、まだいっぱいやることがありますね。

○事例発表者（村井）

はい。

●知 事

村井さんは、ごく普通の子ですが、しっかりと自分を持って、やりたいことがあって前へ進んでくれているので、我々も頼もしいです。

本当にこれからもいろんなことに頑張ってください。きっと夢を大きく持てば、それはまた実現できると思います。

それでは発表をいただきました村井さんに、もう一度大きな拍手をお願いいたします。
(拍手)

事例発表④

●知 事

ありがとうございました。それでは続いて発表にいきたいと思います。今日は1組多いので続けてまいります。市立広島工業高校情報電子科を代表して、岡本真美さんと坂倉佑希さんをお願いします。

岡本さん、坂倉さんが通われている市立広島工業高校情報電子科では、室内環境を監視し熱中症対策などに役立つ環境センサーユニットの製造販売ビジネスプランを考案して、今年の第3回高校生ビジネスプラン・グランプリ優秀賞を獲得されました。また、一昨年8月の土砂災害を受けて、土砂災害検査センサーユニットの研究開発にも取り組まれています。

発表のテーマは、「高校生による持続可能な社会の実現～エコ・エンジニアを目指して！～」です。

それでは岡本さん、坂倉さん、よろしく申し上げます。

○事例発表者（岡本）

私たちは、広島市立広島工業高等学校情報電子科の岡本と坂倉です。私たち工業高校生として社会に貢献できるエンジニアを目指し、日々学習をしています。その教育活動を紹介させていただきますので、よろしく申し上げます。(拍手)

本校は、広島市南区の黄金山麓に位置し、一昨年(2019年)の10月に創立90周年を迎えました。全日制は6科、定時制1科を併設している工業高校です。本日は情報電子科の取組を中心に紹介させていただきます。

工業高校はものづくりの基礎・基本を身につけ、身につけた技術をものづくりコンテスト競技などでさらに高め合っています。さらには広島マイスターの方々を初め、多くの方々のご支援をいただきながら成果を上げています。そして、今年度から本校では広島市工サイエンス工房を始めました。この取組は高校生が授業で習得した技術や技能を生かして地域に貢献するのが目的です。具体的には依頼していただいた幼稚園の靴入れや特別支援学校の窓清掃訓練用アルミサッシ、英語教育支援ソフトウェアなど教科・課題研究で取り組んでいます。現在は町内会のおみこし台やレーシングカーF3の修復、中学校の教材などの依頼に取り組んでいます。お困りのことなどがございましたら、工業高校にご連絡ください。全てお応えすることはできませんが、可能な範囲でご協力できると思います。

それでは、私たちの取組を紹介します。私たちのメインテーマは、高校生による持続可能な社会の実現です。そして、行動目標として課題に気づき、解決方向を考え、そして実践を繰り返す。これらを通じてエコ社会の構築に貢献するエコ・エンジニアを目指しています。

今年度は昨年度(2019年度)の取組を引き継ぎ、土砂崩れ検知システム、そして新たな取組として熱中症対策ユニットの開発に取り組みました。今年度取り組んだ熱中症対策ユニットの開発は、室内での熱中症患者が多いというニュースを聞いたことから開発を始めました。

消防庁によると今年の全国の熱中症による救急搬送された方が5万5,852人で50%を越える方が高齢者の方々でした。さらに、地球環境の地球温暖化の影響により今後も増加傾向は続くと考えられることから、熱中症対策ユニットの開発に取り組みました。熱中症対策ユニットの開発は、デザイン思考で実用化を目指していきます。みんなが共感した熱中症を防ぐから、その問題点について原因や症状を調べ、実際に介護士の方々からアドバイスをいただきながらユニットKを試作しました。

このユニットの機能としては、人感センサーで室内に人がいるか判断し、人がいる場合、温湿度センサーで読み取ったデータの数値をもとに熱中症になる危険性が高まる値になると、スピーカーから音声メッセージによって喚起や水分を取るよう促すなど、室内の状況から知らない間に熱中症にならないように音声で知らせます。さらに危険度が高まったら学習リモコンでエアコンなど設定した機器を自動的に制御を行い設定したメールアドレスにインターネットを通じてスマホ等に配信します。そして、照度センサーで昼夜モードを自動的に切り替え、音声メッセージで睡眠を妨げることはありません。

(ビデオ映像)

これは実際にKが動作している様子です。

「こんにちは。Kくんです。」

「温度 23.5 度です。湿度 38.9%です。CO₂ 1,333 p p mです。」
実際にドライヤーでセンサーを高温にしてみます。

「熱中症に気をつけて。」

さらにセンサーを高温にすると赤外線リモコンが機器をオンにします。

「扇風機つけるね。」

扇風機でセンサーを冷やすと機器がオフになります。

このユニットを発展させて時計と一体化させることを考えています。時計と一体化させることで、日常生活の中に溶け込んで使っていただけたらと考えています。そして、モニターに危険度を表示させることで、耳の遠いお年寄りの方々にも便利に使ってもらえると思っています。

これまでの取組は第3回、第4回イオンエコワングランプリ最終審査で奨励賞、第3回高校生ビジネスグランプリファイナリスト10で優秀賞を受賞しました。これらのコンテストに参加して貴重なご意見をいただいたことが今後の取組に役立っています。

発展研究としてセンサー情報を中心としたものがインターネットにつながるIoT、インターネットオブシングス技術の活用として植物の育成に取り組んでいます。

左側の植物育成システムはフルカラーLEDを使用して、植物の育成に適した光の波長などのプログラムを研究しています。

シート中央の天気予報を活用した自動散水システムは、土壌水分量と天気予報から雨が降る可能性が高い場合など、水を制御します。

右側の温室内のCO₂濃度自動調節システムは、密閉された温室栽培の場合、光合成によってCO₂濃度が減少し、光合成量も低下していきます。このシステムは、温室内の植物に適したCO₂濃度にする事で光合成を活性化させ、植物の育成を促進させる研究などを分担して継続しています。将来イノベーションしていく社会に対応し、エコ社会の構築に貢献するエコ・エンジニアを目指していきます。

以上で発表を終わります。ありがとうございました。(拍手)

●知 事

ありがとうございました。岡本さん、坂倉さん、この熱中症対策の環境センサーユニットは何人ぐらいで取り組んだのですか。

○事例発表者（岡本）

3年生5人ぐらいですね。

●知 事

実際受賞した時の気持ちはどうでした。受賞できるというふうに思った？

○事例発表者（岡本）

いや、全然思っなくて、ベストテンに選ばれたことも、もうすごく驚きました。

●知 事

中国新聞にも大きく取り上げられていましたね。エコ・エンジニアを目指すということで、これは今1つのみんなのテーマになっているのかな。

○事例発表者（岡本）

そうですね、環境センサーを使ってエコに関するユニットをどんどん開発して行って、今7年目ぐらいになるんですけど。

●知 事

もう7年間ですか。では先輩からずーっと引き継いでるわけですね。

○事例発表者（岡本）

そうですね。はい。

●知 事

先輩の研究を改良したりすることもあるのですか。

○事例発表者（岡本）

そうですね。私たちは土砂災害検知センサーユニットを先輩たちが考えて、ものにして、そこから課題となったものをまた研究して改良していくという作業はしました。

●知 事

なるほど。坂倉さんは今、2年生だよな。

○事例発表者（坂倉）

はい。

●知 事

来年はどのようなプロジェクトに取り組むつもりですか。

○事例発表者（坂倉）

同じく3年生がやってきたものを2年生がまた3年生になって改良していくっていうのもやっていきたいし、新たに問題が出てきたときに自分たちで何か解決方法を探していけたらいいなとは思っています。

●知 事

何かいろいろな工夫もありますよね。時計と一緒にするというのは、お年寄りの方も必ず時計は見るからですか。

○事例発表者（岡本）

そうですね。音だけだったら聞こえなかったりする方もいらっしゃるので、時計と一緒にしたら毎時間、時間を見るたびに今何度ですよっていうことも確認できるので、そっちらのほうが気づきやすいと思ったので、時計と一体化させることを考えています。

●知 事

なるほど。ありがとうございます。いろいろな地域貢献活動を冒頭のところで説明をされていましたが、僕はその中で着目したのが、窓枠の掃除の訓練用のサッシです。特別支援学校のためにつくってくれて、それを特別支援学校に寄贈してくれたのですね。

○事例発表者（坂倉）

はい。

●知 事

こういう形で本当に社会の問題に目を向けて、そしていろんなことに取り組んでくれていてということで、今どきの高校生、最近の若い子はと言われますが、こうしてみると、すごく問題意識を持っていろいろなことに取り組んでくれており、本当にうれしいですね。

岡本さんはもう3年生だから卒業したのかな。

○事例発表者（岡本）

はい。卒業しました。

●知 事

では進路は。

○事例発表者（岡本）

大学進学です。

●知 事

どんな勉強をするのですか。

○事例発表者（岡本）

広島市立大学で情報科学部に入って、センサーネットワークのこととか、もっと発展的に学びたいなと思っています。

●知 事

なるほど。すばらしいですね。（拍手）

ありがとうございます。市立大の情報科学部は、全国的にも有名ですから、頑張ってください。

○事例発表者（岡本）

ありがとうございます。

●知 事

坂倉さんはどんな進路を考えていますか。

○事例発表者（坂倉）

私は就職を目指していて、実は私はOECD広島創生イノベーションスクールっていうプロジェクトに参加しています。

●知 事

そうなんだ。

○事例発表者（坂倉）

はい。で、いろんな学校の方と触れ合ってから人と接するのが好きになったので、何か接客業とかにつきたいなと思っています。

●知 事

なるほど。ありがとうございます。OECDイノベーションスクールというのは、県の教育委員会が主催する、いろいろな学校から集まってもらって海外の高校生とも交流しながら進めているプロジェクトです。ありがとうございます。

本当にこうして何か前途が明るいなという感じのお二人です。今日は学校の活動の発表をしていただきました。岡本さん、坂倉さんにもう一度大きな拍手をお願いをいたします。どうもありがとうございました。(拍手)

事例発表⑤

●知 事

ありがとうございました。それでは最後の発表に移りたいと思います。県立湯来南高校を代表して、和手茜さん、小田樹君、松本鮎実さん、そして後ほど登場予定の廣岡和樹君と先崎梨帆さんです。

皆さんが通われている県立湯来南高校では、生徒が中山間地域の次世代リーダーとして活躍できる場を設ける、広島県高校生による中山間地域わくわく事業を展開しています。学校が湯来町を元気にするをスローガンに、湯来南高校温泉同好会プロジェクトを実施中です。

また、近隣施設と連携して地元食材を用いた新メニューや商品の開発・販売などを通じて地域の活性化に取り組んでおられます。

今日の発表のテーマは、「学校が湯来町を元気にする、湯来南高校温泉同好会プロジェクト」です。

それでは、よろしく申し上げます。(拍手)

○事例発表者（和手）

ただいまから湯来南高校の発表を始めます。姿勢。礼。よろしく申し上げます。(拍手)

本校では今年度から3年計画で、平成27年度高校生による中山間地域わくわく事業に取り組んできました。2月5日には地域活性化プラン発表会がサテライトキャンパス広島で行われ、県内24校の県立高校が発表しました。本校のプランは、学校が湯来町を元気にする湯来南高校温泉同好会プロジェクトです。

湯来町は湯が来るという名前のおり、湯来温泉と湯の山温泉の2つの温泉があり、国民宿舎湯来ロッジや温泉プールのあるクアハウス湯の山を初め、豊かな自然観光資源を楽しむことができます。

今年度、さまざまな地域活性化プランを実行してきました。

1つ目は、クアハウス湯の山活用促進プロジェクトを企画し、施設の方との話し合いをしました。

2つ目は、修道大学の学生の方と湯の山温泉の周りでフィールドワークをし、旅館組合やNPOの方々と地域の課題について話し合いました。

3つ目は、湯来ホテル観光プロジェクトとして佐伯区湯来出張所長岡本様の講義内容をまとめ、文化祭や湯来温泉にある湯来交流体験センターでパネル展示をしました。

4つ目は、これは地域のお店の方との特産品開発プロジェクトの話合いの様子です。

5つ目は、学校玄関で飼育しているホシチョウザメをマスコットキャラクターチョウ助としてシールや着ぐるみをつくりました。

こちらにいるのがマスコットのチョウ助です。うちわとシールとクリアファイルを持ってきました。

6つ目は、全国大会で活躍をしている和太鼓部の地域ボランティア活動の様子です。これは、クアハウス湯の山で季節のテーブルコーディネートとして夏休みから季節ごとにテーブルセッティングの展示をしてきました。このテーブルセッティングの活動の様子は広島テレビで取り上げていただきました。

ここからは地域特産品開発プロジェクトの3つの企画を詳しくご紹介します。このプロジェクトの対象は、安全・安心な食品の重要性を理解するおいしいものが好きな人です。

まず1つ目は、せとうちさっぱりサラダです。ひろしま給食100万食プロジェクトで優秀レシピ賞をいただき、夏休みには湯来南公民館で小学生対象の料理講習会でレシピを披露しました。

2つ目は、湯来ロッジでの丸こんにやくを使った新メニュー提案の会議の様子です。試食や話し合いを重ねコロッケランチが完成し、中国新聞にも掲載されました。昨年9月から湯来ロッジのメニューに加えられました。

3つ目は、これがメインですが、湯来には砂谷牛乳という安全・安心でおいしい乳製品をつくっている会社があります。この砂谷牛乳を使ってミルクジャムやお菓子をつくっている空ロママのみるく工房というお店があります。このソルティーミルクジャムは、ザ・広島ブランド認定特産品に選ばれており、地域では有名なお店です。この砂谷牛乳を使ってミルクジャムや、この空ロママのみるく工房と連携し、夏休み中に商品アレンジのアイディアを出し、試作や試食を何度も繰り返し、打ち合わせを重ね、国産のスモモを使った巴旦杏ミルクジャムとココアミルクジャムが誕生しました。

巴旦杏ミルクジャムです。湯崎知事、試食してみてください。

●知 事

いただきます。

何とも言えない優しい甘さですね。本当にミルクジャムってどんなのかなというと、湯来の方は皆さんご存知だと思うのですが、表現が難しいですね。おいしいです。(笑い)
(拍手)

○事例発表者（和手）

商品はお店で製造していただき、私たちは瓶に張るシールデザインや商品説明のカード、ポスターを作成し、ラッピング方法にもこだわりました。シール用紙、ラミネート、ポスター用紙、ラッピングなどが学校でかかる費用の主なものです。

販売場所は9月の本校体育祭を手始めに、第16回牛乳フェスティバル、つりぼりでの秋祭り、空口ママのみるく工房、ばあちゃんの元気な店などで販売し、商品の仕入れ、ラッピング、ポスターやポップの作成など、売り上げ向上を目指して活動しました。

あれがポスターとポップです。

また、9月にはRCC中国放送イマなまっ！にも取り上げていただき、これが効果的な広報活動になりました。

1月には和太鼓部の定期演奏会会場のサンピア湯来でPRと販売を行い、用意した商品を完売することができました。1月末には広島県庁東館ロビーで販売し、いろいろな方から声をかけていただきました。

現在は湯来の健康茶を生かしたシフォンケーキの開発を計画進行中です。試作や試食を重ね頑張っています。

このプロジェクトの活動を通して、私たちは安全・安心な食品の重要性を以前にも増して考えるようになりました。そして、地域の特性や企業に誇りを持てるようになり、さらに、新聞やテレビの取材を受けるという貴重な体験もすることができました。

また、湯来地域3,000世帯に配付している学校新聞若桐で商品のPRをし、私たちの活動を広く知ってもらう機会になりました。今後はインターネットを利用した広報活動にも力を入れ、より多くの方々に湯来や町の2つの温泉、湯来の特産品のことを知っていただけるように活動していきたいと考えています。

これで発表を終わります。姿勢。礼。ありがとうございました。(拍手)

●知 事

和手さん、小田君、松本さん、廣岡君、千崎さんどうもありがとうございました。中に入っているのが廣岡君ですか。ありがとう。(拍手)

学校が湯来町を元気にする、中山間地域わくわく事業をやってくれたわけですが、改めて先程、地域の特性や企業に誇りが持てるというふうに言ってくれました。新たな発見とかよかったなとか思うことは、どのような点ですか。

○事例発表者（松本）

松本鮎実です。湯来町で育ったんですけど、やっぱり湯来の特産品っていってもあまり思いつかなくて、でも、湯来南高校に入学してこういう活動を通して湯来にはこんなに誇らしいものがたくさんあるんだと気づくことができました。

●知 事

なるほどね。空口ママのミルクジャムも有名です。普通に過ごしていたらただのお店だ
と思うかもしれませんが、改めて勉強すると、地元の牛乳も使っておいしいものがある
とか気づいたりされるということですね。こういう中山間地域、先程のいろいろなお話の
中にも出てきたと思うのですが、中山間地域だけではなくて足元にある宝物はたくさんあ
ると思います。それを改めて勉強し直すことで、この地域に誇りが持てたり、そういうこ
とを実践してくれているのではないかと思うのですが、このプロジェクトをやる中で、一
番大変だったのはどのようなところですか。

○事例発表者（先崎）

このミルクジャムのふたの部分とか、その周りの原材料名とかの入ってるこのシール用
紙を考えて作ったりするのが大変でした。

●知 事

なるほど。意外なところが大変ですね。実際にビジネスにしようと思うと、そんなとこ
ろまで気を配らないといけない。デザインどうするのかや、素材をどうするのかなどか、
いろいろなことに気をつける必要がある。そういうこともわかったということですね。何
気なく日ごろ使っていますが、それぞれにいろいろな思いが込められたりするのだと思
います。

皆さんも、高校生で1年、2年、3年といると思いますが、将来広島県に残りたいと思
いますか。どこか外に出て勉強なり仕事をしたいと思いますか。

○事例発表者（和手）

はい。広島に残りたいです。私、この田舎で育ったので、県外に出ていきなり都市、大
都市とかに出るのが嫌です。そんな感じです。(笑い)

●知 事

田舎が好きってということですね。

○事例発表者（和手）

はい。

●知 事

僕が聞いているからって無理やり広島と言う必要はないからね。

(笑い)

では次の方は。

○事例発表者（小田）

小田です。県内に残ろうと思います。

●知 事

何を目指すのかな。

○事例発表者（小田）

うーん、まだ何をを目指すかは定まってないですけど、特に県外に出る理由もないので。

●知 事

なるほど。では次は。

○事例発表者（先崎）

私も県内に残ります。田舎っ子なので都会に出ても何もできないっていうか、もう田舎で慣れているので、田舎でも生活できるから出る気はないみたいな感じです。

●知 事

なるほど。別に田舎育ちでも都会に出ても何でもできるよ。大丈夫だからね。では次。

○事例発表者（松本）

私は、大学進学を目指しているのですが、県内の大学に行きたいと思うんですけど、もし受からなかったら県外に出ないといけないので、将来ちゃんと大学で勉強して目指している職業になることができれば県内に戻ってこようと思っています。

●知 事

広島で働きたいということよね。

○事例発表者（松本）

はい。

●知 事

ありがとうございました。廣岡君は県内だったら右ヒレ、県外だったら左ヒレを挙げてください。せーの。(右ヒレが挙がる。拍手)

ありがとう。今日は5人とも県内に残りたいと言ってくれました。これは、各地で聞くと、7年前に始めたころは、4：6か3：7ぐらいで県外に出たいという人が多かったのですが、最近は6：4ぐらいで広島に残りたいという人が増えてきまして、僕もうれしいです。でも県内に残っても県外に出ても、この広島で育った、広島で学んだということを胸に持っていてくれたら、僕はそれでいいのではないかと思っています。だから県内に残るのがだめだと言っているわけではないです。県内に残ってくれるのはすごくありがたいので、県内でも活躍をしてほしいと思いますが、本当にどこにいても広島のことを思ってくれる、広島で教育を受けたことを誇りに思ってくれるとすごくうれしいなと思っています。

それでは、今日、発表をしていただきました、和手さん、小田君、松本さん、廣岡君、千崎さんに、もう一度皆さん、大きな拍手をお願いいたします。ありがとうございました。
(拍手)

○司 会

ありがとうございました。

以上で、予定の事例発表は終了となります。すばらしい発表を本当にありがとうございました。

閉 会

○司 会

それでは、ここで湯崎知事に本日のまとめをお願いいたします。

●知 事

どうもありがとうございました。皆さん、発表をお聞きいただいて、冒頭に私が申し上げた意味もおわかりいただけたのではないかなと思います。例えば安福さんと迫田さんのお二人、地域のいろいろなところで疲弊していることもありますし、大変なことに直面をしていることもあります。地域だけではなく、いろいろなところに課題はありますが、それを放っておけば課題のままですし、だけど自分ができる範囲の中で何かアクションを起こすと、それがとてもすてきなことに広がっていく。この小河内の場合には、田舎暮らし体験塾を通じてたくさんの田舎で住んだことのない人たちに、この小河内のよさを知ってもらって満足をしてもらうということにつながっていますし、あるいはロングトレイルの田川さんを初めとする皆さんが本当に広島を宝を磨いてくれることによって、大きな可能性を秘めています。韓国では、山岳というか山歩きがすごく流行しているので、広島にこういうすてきなトレイルがあったらたくさんのお客さんも来てくれるのではないかと思います。

す。

そして、中学生高校生それぞれ発表をいただきましたが、みんなも一生懸命頑張ってくれている。自分の思いだとかあるいは地域とのつながりを大切にすることによって、それが自分自身の成長あるいは地域にいい影響を与えていき元気な地域づくりにつながっていくとか、そういうことが起きているのではないかなと思います。

この中で本当に共通しているのは、みんなそれぞれ黙って指をくわえて見ているだけではなくて、何かをやっている。村井さんは文部科学大臣賞を受けたすばらしい書道の才能があると思いますが、でも、みんなある意味でいうと普通の子たちですし、普通の方々だと思います。決してスーパーヒーローでもないと思います。でも自分ができること、自分の気づいたこと、自分の役割の中で何かできることに挑戦することによって、それがだんだんと大きな違いを生んでいくのではないかなと思います。その積み重ねが私はこの地域の元気であったり、あるいはこの市や町の元気であったり、あるいは県の元気ということにつながっていくのではないかなというふうに感じます。

これはずーっと続けてきました県政知事懇談会、特にこのチャレンジ・トークということで地域のそれぞれの皆さんにお話をいただいていく中で、本当に深く実感をしてきたことであります。お一人お一人の、放っておかないとか何か少しやってみようという気持ちが本当に大きな違いを生むことだと思います。有名なことわざに「北京で蝶が羽ばたくとニューヨークで嵐が起きる」というのがあります。北京で小さな蝶が羽を羽ばたかせるとそれが大きな影響を、だんだんと伝わってついにニューヨークに届いたときには大きな嵐になるという、そういうことが地域の課題についてもあるのではないかなと思います。そのときに、大事なことは、蝶が羽ばたかないとニューヨークでは嵐が起きないということなのです。また、蝶が羽ばたけばニューヨークで嵐を起こすことはできるかもしれない。そういうことではないかなと思います。

本当に最後の締めくくりに当たって、今日もすばらしい発表をいただけて私は本当に幸運だったと思っております。ぜひ皆様も、また今日から日常にお戻りになられたときに、自分の周りで何ができるかというのを考えていただいて、今日こういうふうにご参加いただくことだけでも私は違いを生んでいくということだと思います。何かあっちのほうでやっていることなので関与しないでは、何も起きないのです。こうして参加いただくことによって、あるいはそれをまた家族とかご友人の方にお話をいただくことだけでもまた何かを生んでいくのではないかなと思います。そういう形で地域の元気を、これから皆さんの手でつくっていただけたらなと思います。我々行政はそれを精一杯サポートしてまいりたいというふうに思います。

それでは、改めまして今日発表をいただきました5組の皆様に、もう一度大きな感謝の拍手をお願いをいたします。本当にありがとうございました。(拍手)

そして最後に、私から1つだけお知らせがございますので、お願いをしたいと思います。

一昨年(2016年)の8月の土砂災害は、皆さんご承知のとおりですが、この災害ではその後の亡くなられた方も含めて76名の方が尊い命を落とされるということになりました。再びこういう災害を発生をさせないために今、広島県では防災・減災対策にこれまで以上に力を入れて取り組んでいるところです。災害に強い広島県の実現に向けて県民の皆さんや自主防災組織、あるいは事業者、そして行政が一体となって取り組む、広島県「みんなで減災」県民総ぐるみ運動を去年の4月からスタートしております。お手元の資料をご覧くださいればと思うのですが、この運動5つの行動目標を定めて実施をしています。この運動をわかりやすくお伝えするウェブページを新しく2月1日から立ち上げています。これも今日のチラシに載っていますが、広島県「みんなで減災」初めの一步で検索をできますので、ぜひお戻りになったら、スマートフォンあるいはパソコンでご覧いただきたいと思います。

災害はいつ起こるか分からないというものでありまして、災害に備えて、身の回りの土砂災害や、洪水といった危険箇所、避難場所、避難経路などを、まず知っていただくということが大変重要であります。災害の危険箇所や避難場所につきましては、先ほどのウェブページでもご覧いただけますし、今日は後ろをご覧くださいますと、出口の左側のほうにハザードマップといわれるものを掲示してあります。湯来町と佐伯区全体の洪水のハザードマップを掲示してありますのでご覧いただければと思います。市内のその他の地域については、広島市のホームページにも掲載されていますので、ぜひお戻りになってご覧いただければと思います。そして、ぜひご自身に加えてご家庭や職場の皆さん、あるいは地域でもう一度ご確認をいただければと思いますので、どうぞよろしく願いをいたします。

私からは以上です。

本日は本当にどうもありがとうございました。(拍手)

○事務局

知事、すいません。ちょうど終了時間も過ぎてるんですけど、少しだけ私たち事務局のほうから会場の皆さんに1つだけお知らせをさせていただきたいんですけど。

●知 事

はい。

○事務局

私は、県庁の広報課で広島県公式のツイッターとフェイスブックを担当しております寺本と申します。

突然ですが、皆さんは、県の公式SNSの存在はご存じでしょうか。

広島県では、フェイスブックやツイッターといったインターネット上のサービスSNS

を活用し、皆さんの暮らしに役立つ情報を日々発信しています。先日は県内の23市町によるリレーPRという連載を行い、グルメや観光など、各地域ご自慢のネタを掲載しました。今画面に出ているのが9月に掲載した広島市の投稿の写真です。こちらは広島お好み焼きに関する広島通認定試験に関する投稿でした。このように県の公式SNSでは、地域に密着した情報を含め、毎日投稿を行っています。広島県のSNS知らなかったよという方はぜひ広島県のページをいいね、またはフォローしていただければと思います。

本日、お配りさせていただいてる封筒の中にもオレンジ色のSNSのチラシを入れさせていただきます。フェイスブックやツイッターやっていないんだけどなという方もいらっしゃると思うんですが、本日この機会にぜひご登録をいただいて広島県の情報をキャッチしていただければと思います。

これからも皆さんの生活のお役に立てる情報を1人でも多くの方にお届けするべく、また本日のチャレンジ・トーク同様に、広島県の元気を発信しどんどん盛り上げていくべく、頑張っまいると思いますので、ぜひとも皆さんのお力もお借りできればと思います。

以上です。お時間いただきありがとうございました。(拍手)

○司 会

事務局からのお願いも聞いていただきまして、ありがとうございました。

以上をもちまして、湯崎英彦の地域の宝チャレンジ・トークを閉会いたします。ご来場いただきました皆様、どうもありがとうございました。

(拍手)

なお、ご来場時にお渡ししておりますアンケートを出口で回収しておりますので、ご協力いただければと思います。

本日は、どうもほんとにありがとうございました。